

# 地方創生と伝統行事

## —土地の記憶を行動で共有する—

### ⑥「宇和島の八ツ鹿踊り」(後編その4)

専門職 平沼 浩

#### 目次

- |                        |                   |
|------------------------|-------------------|
| 1. はじめに                | 4. シカの生態 (後編その1)  |
| 2. 宇和島の八ツ鹿踊り           | 5. 鹿と日本人 (後編その1～) |
| 3. シカとシシと獅子<br>(以上、前編) | (うち、(6)～(8)が今号)   |
|                        | 6. まとめ            |

本稿前編(179号)で紹介した愛媛県宇和島市に伝わる八ツ鹿踊りは、宇和島伊達藩総鎮守であった宇和津彦神社の例大祭(10月29日)において、奉納ならびに家々を巡る練り物として鹿に扮した8人の少年により演じられる。7頭の雄鹿が1頭の雌鹿を探し訪ね、訪問先の庭で再会して喜び合うという筋立ての「雌鹿隠し」の物語によって、訪問先はラッキーでハッピーな空間となる。宇和島の八ツ鹿踊りの鹿は、福を招く霊獣なのである。

後編では関連補足として、生物としてのシカの生態とともに古代から現代までの鹿と日本人の関わりを「狩猟(実用)獣」、「害獣」、「霊獣」の3つの側面から実例をあげ考察することとした。

草食の哺乳類であるシカの営みは太古から変わらず、夏に栄養価の高い植物を摂取し、秋の繁殖期には力の強いナワバリ・オスがメスの群れを独占する。食料の乏しい冬を乗り越え、翌年夏にメスは出産期を迎える。

これに対して、人の社会の文化や生活は時代とともに変化する。今回は、鎌倉時代から戦国時代の鹿と日本人の関係を取り上げる。

## 5. 鹿と日本人

### (6) 鎌倉時代

まず、鎌倉時代に成立した『平家物語』、『曾我物語』、そして『愚管抄』に描かれた鹿と東国武士に注目したい。

#### ① 『平家物語』一の谷の合戦

源平一の谷の合戦における源義経の<sup>ひよどりごえ</sup>鷲越は、『平家物語』の名場面の一つである。

季節は雪の消え切らない2月初旬、土地勘のない<sup>はりま</sup>播磨の地を義経ら一行は、「老いた馬は道を知る」の故事により老馬を先導役に立てて進軍していた。そこに武蔵坊弁慶が土地の事情に明るい老獵師を連れてくる。義経と老獵師のやり取りを杉本圭三郎の現代語訳『平家物語(三)』(2017)から一部抜粋する。

「ここから平家の城郭一の谷へ馬でかけ下りようと思うがどうか」

「けっしてできることではありません。三十丈の谷、十五丈の突き出た岩などというところは、人の通れる所ではありません。まして御馬などは思いもありません。そのうえ、城のうちでは、落し穴も堀り、<sup>ひま</sup>菱を植えて待ち構え申しているでしょう」と申

した。

「では、そのような所を鹿は通るか」

「鹿は通ります。世間さえ暖かになりますと、草の深く茂るところに臥そうとして、播磨の鹿は丹波へ越え、世間さえ寒くなりますと、雪の浅い所で餌をあさろうと、丹波の鹿は播磨の印南野へ通ってまいります」と申した。御曹司は、

「それならそこは馬場同然だ。鹿の通える所を馬が通れないことはない。ただちにおまえが道案内をせよ」と言われた。

「自分は年をとって、不可能なこと」と申す。

「おまえに子はないか」

「ございます」といって、熊王という童で、生年十八歳になる子をさしだした。

(注) ▼丈：約3m。▼菱：先の尖った鉄製の菱の実の形の兵器。▼印南野：兵庫県明石市と加古川市の間一帯にあった野。▼御曹司：義経。▼馬場：乗馬の訓練場。

『平家物語』は、鴨越の案内役となる若者について、義経から一字を授かり鷲尾三郎義久と名乗り、義経が奥州で没するまで行動を共にした兵だったと続ける。

地元獵師が不可能と断言した鴨越を義経は、『鹿の通える所を馬が通れないことはない』の一言で覆し作戦を実行に移す。そして、鴨越作戦を可能とする裏付けは、東国武士団



源義経と武蔵坊弁慶の像。

神奈川県藤沢市・白旗神社。(筆者撮影、以下同じ)

の鹿狩りで培った優れた騎馬技術だった。

これが史実か否かはともかく、義経の軍略家としての側面と東国武士の狩獵者としての側面を端的に表現したエピソードである。

『平家物語』の成立過程は、『徒然草』の226段によると、天台座主(天台宗総本山・比叡山延暦寺トップ)の慈鎮(またの名を慈円)の支援を受けた信濃前司行長が作者であり、その行長が生仏という名の盲目僧に教え語り、東国出身の生仏が武士の事情や弓馬技術を聞いて補足したもので、それを琵琶法師が習い伝えたのだという。

慈鎮(慈円)は後で触れる『愚管抄』の著者であり鎌倉幕府寄りの人物である。『平家物語』誕生に関わった者が、源氏や東国の縁者ばかりだったとすれば、源氏鼻貞の内容になるのは無理からぬことかもしれない。

ところで、武蔵坊弁慶のような荒法師の存在は、平安後期には珍しいものではなかった。『平家物語』は、山門の大衆と呼ばれる武装衆徒がしばしば朝廷に無法な訴えの実力行使に及び、これに平清盛が対処するエピソードを伝えている。たとえば、清盛の悪行の1つに数えられる奈良炎上は、興福寺の武装衆徒の暴発を鎮めるために派遣された非武装の使者60余名が武装衆徒に襲撃されて首が猿沢池に晒される事件が引き金になっている。

殺人も辞さない僧兵の誕生について、衣川仁は『僧兵=祈りと暴力の力』(2010)で、産みの親は天台座主良源(912-985)であると指摘している。平安時代中期以降、殺生罪業観を決定づけた『往生要集』をまとめた源信は、この良源の弟子にあたる。『往生要集』については本稿後編その3(184号)で紹介した。

一見、殺生戒と矛盾する僧兵集団創設を良源は、師の教えに背き徒党を組んで比叡山を往来する武装した悪しき僧侶は比叡山の恥であり、これを取締り逮捕するためとした。

## ② 『曾我物語』の敵討と鹿狩り

『曾我物語』は哀れな兄弟の敵討物語である。作者未詳のこの物語を語り伝えたのは盲目の女性芸能者の瞽女だった。新編古典文学全集『曾我物語』(2002)を参考に大まかなあらすじとその特徴を紹介する。

主人公の曾我十郎<sup>すけなり</sup>祐成と五郎<sup>ときむね</sup>時宗の兄弟は幼少期に、祖父である伊東祐親<sup>すけちか</sup>の所領をめぐる怨恨から工藤祐経<sup>すけつね</sup>の祐親暗殺計画の巻き添えで父の河津三郎<sup>すけみち</sup>祐道を殺されてしまう。標的とされた伊東祐親は致命傷とならず生き残る。成長した兄弟は、艱難辛苦の末に工藤祐経を討ち果たすが、直後に兄は誅殺され、生き残った弟は、将軍源頼朝の裁きを受ける。頼朝は助命を考へるも、梶原景時のそれでは秩序が保てないという助言により斬首を言い渡す。なお、曾我は母親の再婚先の姓である。

この物語の特徴は、節目毎に登場する鹿狩りの場面である。曾我兄弟の父が殺されたのは、伊豆半島の伊東南部の奥野で催された巻狩り(大勢で四方から鹿を追込み取り巻いて射取る大規模な鹿狩り)の際であり、兄弟が敵討の機会を窺い続けたのも信濃、上野、下野で催された巻狩りであり、最終的に兄弟

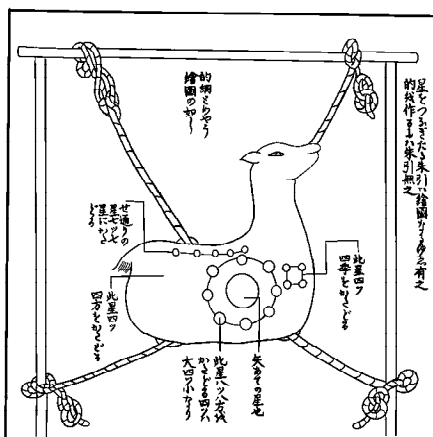
が悲願の敵討を果たすのも富士山の裾野で催された富士野の巻狩りの際である。この物語は殺人計画と鹿狩りが表裏一体の背中合わせの構造になっている。そして、そもそもの怨恨連鎖のはじまりにも鹿狩りが絡んでいる。工藤祐経の父祐継(伊東祐親の腹違いの兄)は鹿狩りの帰途で病を患い病死し、祐経が幼少だったことに乗じて伊東祐親がその所領を横領したのである。

鹿狩りと背中合わせで展開するこの物語の特徴について、前出の『曾我物語』巻末解説「狩場の物語」から一部抜粋して紹介したい。

「狩獵民としての性格も持っていた当時の武士たちにとって、狩場は、日常の生活の場でもあり、また山の神々と交流し、その前で己の技量を示す晴れの場でもあった。その狩場で事件が起きるといのは、物語としては自然なことである。あるいは、祐経や兄弟の選択に、神々の庭の晴れの場でという意識が働いたのではないかとの想像も許されるだろう。」

もう1つの特徴は、源頼朝の存在感の変化である。曾我兄弟の父が殺された伊豆・奥野の巻狩りには頼朝も加わっていた。ただし、伊東祐親預りの流人の身であり無力な存在だった。そんな頼朝が、伊東祐親の上京中にその娘と結ばれ千鶴という子まで成したことに

草鹿。弓射の稽古用具のひとつ。



草鹿は、草を束ねて鹿を象った稽古用的である。『曾我物語』には、5歳の兄十郎が亡父の弓具を用い草鹿で弓の稽古をする切ないエピソードがある。『古事類苑』の武技部より筆者模写。



曾我兄弟の像。静岡県富士市・曾我寺。境内には曾我兄弟の霊を弔う墓石がある。

祐親は激怒し、千鶴を殺させ頼朝を襲撃させる。逃亡した頼朝は北条時政のもとへ逃れる。

北条時政の庇護を受け、時政の娘政子と結ばれてからの頼朝は、坂東を平定し鎌倉殿となり、平氏討伐を果たし、奥州藤原氏も平定し、征夷大將軍という巨大な存在になっていく。兄弟の敵<sup>かたき</sup>である工藤祐経も頼朝に重用され出世する。この間、頼朝にとって我が子を殺した敵である伊東祐親は自害させられる。

成長した兄弟が敵討の機会を窺い続けた信濃、上野、下野での巻狩りは、頼朝が征夷大將軍を任じてから主催したものであり、兄弟が敵討を果たす富士野の巻狩りは、頼朝が東国武士を大動員して催したもので頼朝の後継者となる嫡男頼家の晴れの舞台でもあった。

流人の身から征夷大將軍に上り詰めて華々しく巻狩りを主催した源頼朝に対し、父の敵討ちだけに生きた曾我兄弟の人生は暗澹としており、その明暗において対照的である。

### ③ 『愚管抄』の鹿狩り

『愚管抄』は、藤原摂関家一族に生まれ天台座主を四度務めた慈円（1155-1225）が、初代神武天皇の治世から鎌倉時代前期の承久の乱（1221）の頃までの歴史を「道理」をキーワードにして考察した全7巻の史論書である。愚管とは私見の謙遜語である。

保元の乱（1156）を歴史の転換点とみた「武者ノ世ニナリニケル也」の一説は有名である。幼帝を立て外戚として藤原氏が行った摂関政治やその後の上皇による院政に批判的な一方で、鎌倉幕府成立は必然の流れと説いた。

なお、三代將軍実朝亡き後に尼將軍こと北条政子が次期將軍として受け入れた頼経は、慈円の兄弟のひ孫にあたる。

さて、そんな『愚管抄』に鹿に関するエピソードを探してみると僅か2箇所しかない。いずれも源頼朝を賛美する文脈においてである。大隅和雄の現代語訳『愚管抄』（2012）か

ら該当箇所を抜粋して紹介する。

#### ・奥州平定後の頼朝

「頼朝は鎌倉を出発して以来、片時たりとも弓の弦をはずさず、また弓を身近にしていたので、郎党どもはひとかたならず恐れあっていた。その武芸の巧みなことは、狩などの時に大鹿と肩をならべて角をつかまえ、手玉にとるほどであった。そして、頼朝の子太郎頼家もまた、古今に絶えてないほどの腕前をもっているとは、かくれもない評判であった。」

#### ・上洛する騎乗の頼朝

「頼朝は、紺・青・丹三色の、<sup>きぬた</sup>砧で打つてつやを出した水干を着て、夏の鹿の毛皮で作った行<sup>むかばき</sup>膝（腰につけて袴の前面を覆うもの）をつけ、本当に雄大な姿で黒い馬に乗っていた。その後、院や内裏に参上したりしたが、後白河法皇も頼朝をたぐいない者と思われるようになったのである。」

最初の文の「狩などの時に大鹿と肩をならべて角をつかまえ、手玉に取るほどであった」とは、不思議な表現である。鹿狩りで弓矢を用いずに鹿を格闘技で倒す表現をとっている。2番目の文では上洛時の頼朝の装いについて、水干や行膝を詳しく書いているが、これらは狩装束である。

慈円は、弓・鹿狩り・狩装束を象徴的に頼朝のイメージと強く結び付けておきながら、具体的に弓矢で鹿を射る行為を書くことを回避しているかのようである。

『愚管抄』で慈円は、法然の専修念仏の支持者があまりに多く、魚鳥食いや女犯が後を絶たないと嘆き、専修念仏を悪魔の教えと断罪している。そうした宗派的信仰心が、具体的な狩りの表現を回避させたのかもかもしれない。しかし、他方で人間同士の戦闘や殺戮は躊躇なく書いている。



宮城県塩釜神社で7月に行われる流鏝馬神事より。  
鎌倉時代に始まる流鏝馬は、狩装束で行われる。



腰から脚を覆う行藤は、白い斑点のある夏毛の鹿革。

次に、鹿狩りへの殺生罪業感に関連して、鎌倉時代中期に成立した仏教説話集『沙石集』と例外的に伝統的な鹿狩りと鹿肉食を許容した「諏訪の鹿食免」を取り上げたい。

#### ④ 『沙石集』 金色の鹿の王

仏教説話集『沙石集』には、鹿苑で金色の鹿の王として生きたブツダの前世物語がある。新編日本古典文学全集『沙石集』(2001)を参考にあらすじを紹介する。

鹿苑には鹿の二王がいた。金色の鹿の王(前世の釈迦菩薩)は500頭の鹿の群れを治め、もう一方の鹿の王(前世の提婆達多)も500頭の鹿の群れを治めていた。金色の鹿の王は、狩り好きの人の王が多くを殺すため、人の王と交渉し、人の王が狩りを止める代わりに鹿の群れから毎日1頭を差し出す約束をする。ところが、差し出される順番が回って

きた鹿の王(前世の提婆達多)の群れの雌鹿は妊娠しており、自分が犠牲になるのは仕方がないが無関係な腹の子まで犠牲になるのは不憫であり、せめて出産が終わってから自分を人の王に差し出して欲しいという。これに鹿の王(前世の提婆達多)は、命が惜しいのは誰も同じであり、約束だから仕方がないという。雌鹿から事情を聞いた金色の鹿の王(前世の釈迦菩薩)は、その身代わりとなり人の王の元へ行く。事情を聞いた人の王は深く感動し慈悲心に目覚め、殺生を止める決意をする。物語はこれで終わる。

ところが、北インドの民話を下敷きにした本家インドの仏教説話集『ジャータカ』の金色の鹿の王の物語は、これで終わらない。松本照敬『ジャータカ』(2019)を参考にあらすじを紹介する。

人の王が狩りを止めたために鹿の獣害に苦しむ民衆が、人の王に狩りの再開を求めるのである。人の王は金色の鹿の王との約束は破棄できないと狩りの再開を拒絶する。そこで金色の鹿の王は人の王に、以後、人の作物を荒らさないことを誓約して物語は終わる。

本家『ジャータカ』の物語は、『沙石集』よりも長く込み入っており、冒頭に人による金色の鹿の王への裏切りがあり、それが伏線となって人の王は、親愛なる民衆から獣害を訴えられても金色の鹿の王との約束に拘る。

しかし、人と交渉可能な話の分かる鹿を設定したファンタジーという点ではどちらも同じである。鹿が作物を荒らさないことを誓約する物語ならば、本稿後編その2(181号)で紹介した奈良時代の『豊後国風土記』にある「頸の峰」の地名由来物語の方が、筆者には好感が持てる。「頸の峰」の物語では、鹿と人の攻防場面において、田主は柵を設け具体的な防御策を講じており、話の分かる鹿が人に誓約するという擬人化ファンタジーに依存しきっていない。

また、『沙石集』に登場する妊娠中の雌鹿は、確かに擬人化フィルターを通してみれば同情を誘い、身代わりになろうとする金色の鹿の王の自己犠牲も立派に見える。しかし、本稿後編その1(180号)で紹介した生物としてのシカの生態からすれば、メスはオスと違い1歳で早くも妊娠可能となり秋に発情期を迎え、メスの群れを独占する強いナワバリ・オスの子を翌年夏に出産する。そうすると、『沙石集』に登場する妊娠中の雌鹿と同時期の雌鹿はほとんどが妊娠中ということになる。

また、およそ獣害の観点からすれば、鹿の王たるナワバリ・オスの死は、次に強いオスに替わるだけであるのに対し、毎年出産を重ねるメスの妊娠は個体数増減という点で影響はより大きいのである。

ファンタジーに目くじらを立てるのは程々にして、『沙石集』について若干補足したい。作者である無住<sup>むじゅう</sup>は、常陸国で出家し諸宗派で修業をしたのちに尾張国で寺を開いた一介の住職である。その彼が、筆を起したのは、弘安2(1279)年の54歳のとき、最後の加筆時は83歳だった。

書名は、沙(いさご=砂)を集めて金(こがね)を求め、石を拾って玉を磨く世俗の人々になぞらえたもので、世俗的な題材を通じて仏教を平易に説こうとした。

収録150余の説話の特徴として、殺生戒に苦悩し葛藤するのは庶民ではなく主として僧侶たちである点があげられる。一説には、無住は「話芸の開祖」とも称される。

また、神仏習合の思想原理である本地垂迹<sup>ほんじすいじやく</sup>により古来の神々は仏菩薩の化身として現れた権現にもかかわらず、なぜ巖島明神<sup>いわくしま</sup>には殺生戒に反して魚を備えるのか、その理由を述べるとともに、鹿や鳥を取る下野宇都宮の神、信州諏訪の神も同様の理由だろうかと言及している。無住は殺生戒の例外と理由についても答えようとしていたのである。

## ⑤ 諏訪の鹿食免

長野県諏訪市にある諏訪大社は全国の諏訪神社の総本社である。仏教の殺生罪業観が浸透する鎌倉時代にあっても幕府の庇護と崇拝を受けた諏訪の神は、古代からの伝統である狩猟や鹿肉食を許してきた。鹿食免とは、諏訪の神が授ける神符(免許状)である。

ただし、諏訪の神は仏教を否定したのではなかった。殺生戒の制約のみを合理化する許容論理を導いていたのである。その論理とは、四句からなる「諏訪の勘文<sup>かんもん</sup>」に集約されている。現在も諏訪大社上社が授与している鹿食免の包装紙から「諏訪の勘文」を引用する。

業盡有情(ごうじんのうじょう)

前世の因縁で宿業の尽きた生物は

雖放不生(はなつといえども)

放つてやっても長くは生きられない定めにある

故宿人身(ゆえにじんしんにやどりて)

したがって人間の身に入って死んでこそ

同証仏果(おなじくぶつかをしょうせよ)

人と同化して成仏することができる

つまり、生物は成仏を願う人に食べられ同化することで成仏できるという論理である。

では、なぜ生物は人と同化しなければ成仏できないのだろうか。

上記四句は、14世紀に成立したとされる『神道集』の諏訪縁起(延暦寺の別院である安居院の作)において、僧正と諏訪大明神の間答の中に登場する。中澤克昭『肉食の社会史』(2018)から現代語訳を抜粋して引用する。

諏訪大明神は維縵国で狩りの習慣があったので、狩庭を大切にされる。嘉禎三年(1237)五月、上州長楽寺の長老である寛提僧正は、供物について不審に思い、大明神に「権実の垂迹は仏菩薩の化身として衆生を済度されるのに、何故多くの獣を殺すのか」と申し上げた。僧正の夢の中で、供

物の鹿・鳥・魚などが金色の仏となって雲の上に昇って行き、大明神が「野辺に住む獣 我に縁なくば憂かりし 闇になほ迷はまし」と詠まれ、雲上に昇る仏（もとは鹿・鳥・魚等）を指差して「業尽有情 雖放不生 故宿人天<sup>(ママ)</sup> 同証仏果」と四句の偈を説いた。これを聞いた寛提僧正は随喜の涙を流したという。

(注)『神道集』の原文も、故宿人身の「身」を「天」と表記している。▼維縵国(ゆいまんこく):天地の果てのゆったりとした国。▼偈(げ):仏徳をたてる韻文。以上の注は筆者による。

なぜ生物は人と同化しなければ成仏できないか。その答えは、諏訪大明神の歌の中にあつた。我(諏訪明神)に出会う機会のない獣たちは成仏できずに闇をさ迷っている。だから、成仏を願う人と同化すれば成仏することができる。そこから導かれた答えが「諏訪の勘文」だったのである。

第6代将軍に皇族の宗尊親王を迎えた鎌倉幕府は、殺生禁断令、鹿肉禁忌の制を導入したが、諏訪の神は幕府により庇護され続けた。

諏訪大社というと、7年毎に催される式年造営御柱大祭<sup>おんぼしらたいさい</sup>が有名だが、諏訪の神が狩猟神であることを物語る特徴的な例祭として、神事に先立ち猪鹿鳥の饗膳<sup>おんとうさい</sup>が整えられる御頭際(4月15日)、諏訪明神の御狩場<sup>みさやま</sup>だった御射山<sup>みかりしんじ</sup>で行われる御狩神事(8月26~30日)があげられる。



現在の諏訪大社上社の鹿食免と鹿食箸。  
現代では、食の安全を祈る人々の神符となっている。

### コラム③馬の毛色を鹿の毛色で表す伝統

馬よりも鹿との付き合いが長い日本では、馬の毛色を鹿の毛色で表す伝統がある。たとえば、『平家物語』から派生した『源平盛衰記』では、源頼朝が伊東祐親の元から北条時政の屋敷に逃げる際に乗った馬は「大鹿毛」であり、源義経が鴨越の際に乗った馬も「大鹿毛」、武士の鑑と称された畠山重忠の馬は「秩父鹿毛」である。また、武田家の歴史書『甲陽軍艦』の冒頭に登場する武田信虎(信玄の父)の愛馬は「鬼鹿毛」である。そして、古いところでは『続日本紀』には神護景雲4(770)年8月、若狭彦神社と宇佐八幡宮に「鹿毛」の馬が奉獻された記録がある。

この伝統は、現在の競走馬の毛色表現に継承されている。JRA日本中央競馬会のホームページにある「サラブレッド講座・毛色の種類」を見ると、サラブレッドの毛色全8種のうち、鹿毛種は鹿毛・黒鹿毛・青鹿毛の3種ある。その代表名馬としてディーブインパクト(鹿毛)、ナリタブライアン(黒鹿毛)、メジロラモーヌ(青鹿毛)等が紹介されている。

逆に、『源平盛衰記』には、司馬遷『史記』本紀にある鹿を馬と言う中国故事が出てくる。秦の二代皇帝胡亥は、父の始皇帝時代から仕える宦官<sup>こがい</sup>の趙高<sup>ちようこう</sup>から「馬でございます」と鹿を献上される。胡亥が「鹿だろう、間違いではないか」と問い直すと、趙高は「いいえ馬です」と睨みを効かせる。すると同席の重臣たちも馬だと言い出し、胡亥も終に馬と認めてしまう。鹿を馬と言わざるを得ない状況を作った趙高の怖さが際立つ逸話である。

#### (参考)

- ・田中幸江・緑川新『完訳 源平盛衰記 四、六』(勉強出版・2005)
- ・佐藤正英 校注・訳『甲陽軍艦』(ちくま学芸文庫・2006)
- ・青木和夫ほか校注『新日本古典文学大系 続日本紀 四』(岩波書店・1995)
- ・JRA日本中央競馬会HP「サラブレッド講座」
- ・吉田賢抗『新釈漢文大系 史記(一)本紀』(明治書院・1973)

#### コラム④『古今集』と『百人一首』の鹿

奥山に 紅葉ふみわけ 鳴く鹿の  
声きく時ぞ 秋は悲しき

同歌は、初の勅撰和歌集である『古今和歌集』(905)に詠み人知らずとして収録されているが、鎌倉時代前期の藤原定家撰『百人一首』では、猿丸大夫の作として知られる。なぜ、作者不明だった歌が、『百人一首』では猿丸大夫の作となったのか、猿丸大夫とは誰なのか、ちょっとした未解決ミステリーである。

さて、解釈論としては、奥山に踏み入ったのは人なのか鹿なのか、議論のあるところだが、それ以上に問題なのは、なぜ鹿の声を聞くと心が痛むのかである。

単に秋の季語に心を動かされたからとも思えない。狩猟期の鹿の声を憐れんでなのか、あるいは一夫多妻の鹿社会で繁殖にあぶれてもなお雌鹿を求めて啼く哀れな雄鹿への共感なのか、解釈の余地は広い。

ちなみに、この歌は花札の絵柄のモチーフになっており、鹿がそっぽを向く構図は無視を意味するシカト(鹿十)の語源ともなった。花札は季節に応じ月毎の絵柄が決まっており、鹿・紅葉は10月の絵柄である。



花札の鹿紅葉。筆者模写。

(参考)

- ・小沢正夫・松田成穂 校注・訳『新編日本古典文学全集 古今和歌集』(小学館・1994)
- ・谷知子編『百人一首(全)』(角川ソフィア文庫・2010)
- ・橋本武『解説百人一首』(ちくま学芸文庫・2014)

#### (7) 室町時代

室町時代からは、鹿の王となった足利義満と室町武士が鹿肉を食べていた証拠ともいえる『尺素往来』を取り上げたい。

##### ① 鹿の王となった足利義満

足利義満の略歴については、佐藤進一『足利義満』(1994)を参考に紹介する。

幼くして室町幕府三代将軍に就任した足利義満(1358-1408)は、左大臣を兼務した後、征夷大将軍を辞し公家の最高位にあたる右大臣に就いた。さらに帝の遺留も聞かず右大臣をあっさり辞すると、出家し道義と名乗った。この時に大量の公家と大名が出家してしまい、朝廷も幕府も義満を頼らざるを得ない状況になる。こうして、武家も公家も超越した存在に自らを置いた義満は、金閣寺を公武上層貴族の社交場とするとともに政務を取り仕切る政庁とした。

足利義満の代名詞といえば、「古都京都の文化財」の構成資産としてユネスコ世界遺産に登録されている金閣寺であろう。なお、金閣(寺)は、臨済宗相国寺派「鹿苑寺」の一部を成す象徴的な建造物であり、鹿苑寺の名は、鹿苑院殿と称された義満の法名に由来する。相国寺(相国とは唐では太政大臣を意味した)を鎌倉五山筆頭に据えたのも義満である。鹿苑とは、ブツダが最初に悟りを開いた場所として知られる。



積雪後の冬の金閣寺。



また、国内の反対を押し切る形で、明の冊封を受けて行った勘合貿易では、義満は明の永楽帝から「日本国王源道義」と称された。

義満の死後に朝廷は太上法皇の尊号を宣下し（これは後に撤回された）、残っている位牌には、「鹿苑院太上法皇」と記されている。

義満が、公家になってから自らを示す花押（サイン）に用いた文字は「鹿」だった。

前出の中澤『肉食の社会史』によれば、義満に関して「巻狩りすなわち弓矢で鹿や猪を狩る狩猟をおこなったことを伝える史料はない」という。

足利義満は、ブツダにあやかり、金色の鹿の王に自らを重ねてみせた。そう考えたくなるほど材料が揃っている。

## ② 『尺素往来』にみる室町武家の宴席食材

室町時代後期随一の知識人として知られた一条兼良（1402-1481）の作とされる『尺素往来』は、短い手紙を意味する尺素とは裏腹に、長文の手紙形式で室町武家に必要な諸々の教養を網羅的に解説した内容になっている。

高橋忠彦・高橋久子『尺素往来 本文と研究』（2022）を参考に一部紹介する。

宴席の当番となった手紙の主は、「長雨が続き、良い食材こそ入手できませんが」と前置きしながら、次の食材を集めておくと告げる。ここでは獣のみ全種を記す。

獣としては、猪、鹿、<sup>かもしか</sup>羚、熊、<sup>うさぎ</sup>兔、狸、<sup>あなぐま</sup>獾、<sup>かわうそ</sup>獺の8種、鳥としては、雉、鶉、鴨等11種及び卵、魚類としては、鯉、鱸、鰻等24種、貝類としては、<sup>あわび</sup>鮑、<sup>かき</sup>牡蠣、<sup>はまぐり</sup>蛤等4種、その他としては、海老、烏賊、蟹等8種。

そのバリエーションは実に豊富であり、ここに肉食忌避や仏教の殺生罪業観は感じられない。ただし、使役動物として飼育されていた馬、牛、犬、また鷹、<sup>う</sup>鶇、鶏がリストに入っていないところが興味深い。

## (8) 戦国時代

戦国時代の鹿狩りについて、前出の中澤『肉食の社会史』は、「狩りと云うは鹿がりの事なり」で知られる『狩詞記』や鹿の取り扱い説明書である『矢開之事』といった故事書から鹿狩りを学ぶ武士がいたこと、また、大名や武家の日記・日誌類から、管領細川正元が近江の琵琶湖湖畔で大規模な鹿狩りを催し、山名家や毛利家では家人と在郷民の鹿狩りをめぐる争いがあったことをあげている。鹿狩りは西国でも行われていたのである。

ここでは、織田信長の鹿狩り、鹿角兜の戦国三武将、若き日の伊達政宗が見た鹿踊について紹介する。

### ① 織田信長の鹿狩り

最近の研究により織田信長は、<sup>うままわり</sup>馬廻（側近の親衛隊的な騎馬武者集団）とともに鹿狩りを行っていたことが分かってきた。

金子拓『織田信長という歴史—「信長記」の彼方へ』（2009）は、複数系統に多種類存在する『信長記』や『信長公記』の伝本について、その著者であり信長に馬廻として仕えた太田牛一による自筆か後世の加筆か等を含めて著述編纂過程を詳しく分析している。

同書で金子は、加賀前田家「尊経閣文庫」収録の『信長記』十五冊本の補足記事から、他の伝本には見られない史料的に検討する価値のあるものとして十数点の記事を列挙している。そのうちの元亀3（1572）年の鹿狩記事を抜粋して紹介する。

正月朔日、御馬廻何茂御出仕在之、二月十三日、稲葉山だちぼくにおゐて御鹿狩と号御触在之、同十八日に御出被成、各々弓鉄炮を以山々谷々<sup>シシゲダモノ</sup>鹿<sup>シシ</sup>余多狩出し、爰かしこにて射殺候也、信長御前へ鹿共懸通候処に、御弓二而射留させられ、御祝着不斜候、御早熊無申計面白御遊興、上下心目

慰候、其日之物数七十八頭也、何茂御機嫌能御帰宅被成、御馬廻それぞれに鹿共被下、悉頂戴也、

(注) ▼何茂：いずれも。▼稲葉山だちぼく：岐阜城のある金華山の東山麗の地名。▼被成：なされ。▼爰かしこ：ここかしこ。▼二而：にて。▼不斜候：斜めならずそうろう。斜めはありふれたこと。▼熊無：限なくの意味か。以上の注は筆者による。

鹿狩りには、鉄砲も用意されたようである。信長が弓で鹿を射とめたことを一同は祝い喜び、獲物78頭は馬廻各自に分配された。

さて、織田信長と言えば、比叡山延暦寺の焼き討ち、浄土真宗・石山本願寺（居城の石山は後の大坂城）との長期攻防戦が有名だが、ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスの記録に信長の宗教観に関する記述がある。松田毅一・川崎桃太『完訳フロイス日本史2』（2000）から一部抜粋して紹介する。

「彼は善き理性と明晰な判断力を有し、神および仏のいっさいの礼拝、尊宗、ならびにあらゆる異教的占トや迷信的慣習の輕蔑者であった。形だけは当初法華宗に属しているような態度を示したが、頭位に就いて後は尊大にすべての偶像を見下げ、若干の点、禅宗の見解に従い、靈魂の不滅、来世の賞罰などはないと見なした。」

「彼の父が尾張で瀕死になった時、彼は父の生命について祈祷することを仏僧らに願い、父が病氣から回復するかどうか訊ねた。彼らは彼が回復するであろうと保証した。しかるに彼は数日後に世を去った。そこで信長は仏僧らをある寺院に監禁し、外から戸を締め、貴僧らは父の健康について虚偽を申し立てたから、今や自らの生命につきさらに念を入れて偶像に祈るがよい、と言い、そして彼らを外から包囲した後、彼らのうち数人を射殺せしめた。」

## ② 鹿角兜の戦国三武将

鹿角の兜で知られる3人の戦国武将を取り上げてみたい。共通点は、勝ち目のない戦いに挑んだ勇氣と信念、そして内陸部の出身という点である。

### ○山中鹿之助

山中幸盛（1545－1578）は、尼子十勇士の筆頭にして、山陰の麒麟児の異名をもつ戦国武将である。通称「鹿之助」の由来は、病弱な兄から山中家の甲冑を譲り受けた際に、その兜に因んだものだという。

尼子氏の居城である月山富田城に侵攻する毛利氏の大軍を幾度も撃退し、尼子氏滅亡後は浪人の身から尼子再興のために戦い続け、無念の最期を遂げた忠義の人である。

島根県安来市の月山富田城跡に建つ山中鹿之助像の兜は、三日月形の前立に鹿角の脇だてであり、三日月に向かい手を合わせて祈る姿を表している。



山中鹿之助像。  
島根県安来市・月山富田城跡。

### ○本多忠勝

本多平八郎忠勝（1548－1610）は、徳川家康の三河以来の重臣である。武田信玄との三方ヶ原の戦いの前哨戦となった一言坂の戦いでは、撤退戦での最後尾の奮戦ぶりに、敵方の武田軍から「家康に過ぎたるもの二つあり、唐の頭と本多平八」と狂歌に歌われたと伝えられる。唐の頭とは、チベット産のヤク（ウシ

科)の尾毛で装飾した兜である。

本多家の家宝として大切にされた忠勝の甲冑は、忠勝の肖像画とともに国の重要文化財となっており、愛知県岡崎市の岡崎公園内の「三河武士のやかた家康館」で見ることができる。「黒糸威 胴丸具足」と名付けられた漆黒の甲冑は、肩から斜に掛けた大玉の数珠の金色がコントラストになっている。兜の大角は森の王者のようであり、大玉の数珠は対戦相手の死を弔う意匠である。なお、大きな鹿角は実戦を想定し着脱可能な仕様になっていた。



本多忠勝像。愛知県岡崎市・岡崎公園。

### ○真田幸村

「<sup>ひのもと</sup>日本一の<sup>つわもの</sup>兵」と称された真田幸村(信繁)(1567-1615)は、戦国時代に終止符を打つ慶長20(1615)年大坂夏の陣で戦死した。その際に甲冑は消失したが、その勇姿は、国の重要文化財である「大坂夏の陣図屏風」(大阪城天守閣所蔵)に描かれている。東西両軍約5千人の激突が描かれた屏風の右隻中央に四天王寺の鳥居があり、その下に赤い甲冑(赤備え)の幸村隊がいる。鳥居の右柱から下方向に鹿角の兜をつけた幸村がおり、鳥居の左柱から下方向に幸村の長男大助がやはり鹿角の兜をつけている。また、鳥居の右方向には、本多忠勝の次男忠朝がおり、やはり鹿角の兜で奮戦している。

幸村隊の旗印である六文銭は、三途の川の渡し賃を意味し、仏教用語の「<sup>ふしやくしんみょう</sup>不<sup>ふ</sup>惜<sup>しやく</sup>身<sup>しん</sup>命<sup>みょう</sup>」

(身命を惜しまず)に通ずるといふ。

大坂夏の陣の前哨戦となった大坂冬の陣の後、家康は幸村に切腹を命ずるが、本多忠勝の助命嘆願により流罪に減刑されている。

大坂夏の陣の敗戦により幸村一族は皆殺しとなるが、次男や娘たちは密かに伊達政宗の重臣片倉小十郎に引き取られ、およそ百年後に仙台真田家として再興を果たす。仙台真田家の兜の前立には小ぶりの鹿角がある。



真田幸村騎馬像。長野県上田市・JR上田駅前。

三武将の兜に鹿角がある理由は判然としない。ただし、一見してただ者でないと印象付けるだけの野性味を帯びた兜であることは間違いない。ちなみに、さるアメリカのゲームソフト会社が製作した『Ghost of Tsushima』の主人公は、元寇の大軍に一人でゲリラ戦を挑む武士であり、その兜にも鹿角がある。時代考証を無視してもそうしたくなる迫力が鹿の角にはあるのだろう。

### ③ 若き日の伊達政宗が見た<sup>ししおどり</sup>鹿踊

19歳で伊達家の家督を継ぎ米沢を本拠地としていた若き日の伊達政宗は、天正15(1587)年、21歳のときに米沢で鹿踊を見ていた。それは、現在も岩手県・宮城県で傳承されている鹿踊に繋がる民俗芸能であり、宇和島の八ツ鹿踊りのルーツに繋がる民俗芸能である。伊達政宗(貞山公)の公式日誌『貞山公治家記録』によると、時は旧暦の7月24

日の晩、場所は片倉小十郎の屋敷である。

廿四日辛亥晩。小十郎宅へ御出、獅子躍御覧。常州佐竹ノ躍、當地ノ躍等アリ。奥筋二於テ孟蘭盆前後此躍アリ。盆ノ供養ナリト云フ。

常州（常陸）佐竹藩の躍、当地（米沢）の躍に加えて「等」とあるので周辺他藩の鹿踊も披露されたようである。

本稿前編（179号）で紹介した柳田国男「獅子舞考」（1916）や菊地和博『シシ踊り 鎮魂供養の民俗』（2012）が指摘しているとおり、獅子躍と表記されてもその実は鹿踊であり、奥筋すなわち現在の東北地方では孟蘭盆の頃に鎮魂供養として行われていたのである。

また、菊地は、「仙台鹿躍り」（現在の岩手県南部に伝った）は、特定の寺社の管轄下で寺社勢力と密接にかかわって発展した点も指摘している。

それにしても、『貞山公治家記録』は、なぜ「鹿」に「獅子」の文字を当てたのだろうか。

実は、江戸時代に村の庄屋が獣害対策の支援を藩に願い出た古文書が滋賀県米原市の山間地で発見されており、その文面でも獅子と表記されていた（詳細は次回）。

発音は同じでも意味を上書きするために表記を変える例は珍しくない。たとえば、棒高跳びの世界記録を何十回も更新したセルゲイ・ブブカは、ありふれた「超人」ではなく飛ぶ人の意味を強調した「鳥人」と称された。

また、映画『シン・ウルトラマン』では、従来モンスターの呼称だった「怪獣」の表記を、被害に着目し、人間に禍をもたらす脅威の存在として「禍威獣」に改めている。

このように単なる草食獣としての「鹿」ではなく脅威の存在として「獅子」の文字が用いられたのではないだろうか。

特に岩手県・宮城県で伝承されている鹿踊

の鹿は、写実的な草食獣の姿ではなく、恐ろしい怪物のようにデフォルメされている。

ちなみに、筆者が香川県の小豆島で取材し本誌（148号）で紹介した虫送り行事は、成長期の稲を虫害から守るために松明の炎で虫を域外に誘導する伝統行事である。この行事に先立って寺で催されていたのが、炎で焼け死ぬ虫への虫供養だった。収穫の脅威となる虫にさえ慈悲心をもって供養していたのである。

想像の域を出るものではないが、秋の狩猟期に先立ち、奥筋すなわち現在の東北地方では孟蘭盆の頃に先祖供養ばかりでなく、脅威の存在でもある（鹿＝獅子）を慈悲心をもって供養していたのではないだろうか。

今回は、江戸時代の鹿と日本人、そして明治時代以降に激変する鹿と日本人の関係について紹介する。

#### （参考資料）

- ・杉本圭三郎 訳・注『新版 平家物語（三）』（講談社学術文庫・2017）
- ・衣川仁『僧兵＝祈りと暴力の力』（講談社選書メチエ・2010）
- ・永積安明 校注・訳『新編日本古典文学全集 方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄』（小学館・1995）
- ・梶原正明ほか 校注・訳『新編日本古典文学全集 曾我物語』（小学館・2002）
- ・『古事類苑』（国立国会図書館デジタルコレクション）
- ・大隅和雄 訳『愚管抄』（講談社学術文庫・2012）
- ・小島孝之 校注・訳『新編日本古典文学全集 沙石集』（小学館・2001）
- ・松本照敬『ジャータカ 仏陀の前世の物語』（角川ソフィア文庫・2019）
- ・岡見正雄・高橋喜一 校注『神道体系文学編一・神道集』（精興社・1988）
- ・中澤克昭『肉食の社会史』（山川出版社・2018）
- ・同『狩猟と権力』（名古屋大学出版会・2022）
- ・谷川健一編『日本の神々 第九巻 美濃・飛騨・信濃』（白水社・1987）
- ・佐藤進一『足利義満』（平凡社ライブラリー・1994）
- ・高橋忠彦・高橋久子編著『尺素往来 本文と研究』（新典社・2022）
- ・金子拓『織田信長という歴史－「信長記」の彼方へ』（勉誠出版・2009）
- ・松田毅一・川崎桃太『完訳フロイス日本史2 織田信長篇II』（中公文庫・2000）
- ・平重道編『仙台藩史料大成・伊達治家記録一貞山公治家記録』（宝文堂出版・1972）
- ・菊地和博『シシ踊り－鎮魂供養の民俗』（岩田書院・2012）